

## 看護の知と実践力の探求 ―ウーマンズヘルスの視点から―

小川 久貴子 (東京女子医科大学看護学部)

人生にはライフサイクルと呼ばれるいくつかの段階があることは、古くから知られており、わたしたちはその概念のなかで生きてきました。しかし、従来のライフサイクルは、男性をモデルにしたものであり、女性のデータに基づいて考えられるようになったのは、20 世紀後半に入ってからといわれています。

日本の平均寿命は男女共 80 歳を超えましたが、それは単に、人生の後半部分が長くなったということの意味するものではありません。女性の高学歴化や就業率の上昇に伴い、晩婚化、出産年齢の高齢化、または妊娠の好機を逃して不妊治療を余儀なくされる人の増加、ひいては少子高齢化をもたらす、社会に多くの影響をあたえています。そして、現代女性のライフサイクルの変化に伴い、熟年期など以前は一般的に認知されていなかったステージが生み出され、また、子育て後の人生が長くなり、更年期は向老期ではなく、人生の折り返し地点と認識されるようになってきました。

このようなライフサイクルの変化に伴い、今までの社会のしくみは女性が女性らしく生きることができにくい仕組みであり、女性の健康へも大きく影響するものでありました。そこで、女性の生活の質をあげ、女性が女性らしく、健康で生活するために必要なものとして、woman's centered care(女性を中心にすえたケア)という考え方が普及しはじめております。生涯を通じての包括的なケアが woman's centered care の原則であり、各ライフステージの多様な課題(知)を明らかにし、きめ細かな看護を実践することが重要です。

本講演では、私が 10 代妊婦・母親講座の実践や研究を通して得た体験を交えながらお話しをします。日本の社会のしくみでは、女性は結婚(入籍)してから出産するという順序性が前提にあり、妊娠先行型結婚や婚外子はいまだに偏見視される風潮があります。さらに、10 代の女性が妊娠・出産するということは、本人のアイデンティティ確立途上に、妻役割や子どもを育む母親役割を一気に担うことに困難さが伴います。10 代女性の多くは、大人への警戒心が強く本音を語らない傾向があるため、助産師・看護師側の健康教育や思いと認識のギャップを生じやすいともいわれています。

このような特徴をふまえて、10 代女性にいかに妊娠・出産・育児の知識を吸収し、母子ともに健康な生活を過ごすように心理・社会的な支援をしてゆけるのか、若い女性たちがいかに自分らしさをたずさえながら夢に向かってゆけるのか、これらの視点をふまえた当事者支援や支援者養成の話もしたいと思います。そして、研究によって得た看護の知を臨床の実践力にどう還元するかを、皆様とご一緒に考えてゆきたいと思います。